

八王子市郷土資料館井上コレクションの 千島出土骨角器

高橋 健*

八王子市郷土資料館の井上郷太郎コレクションから、千島出土の骨角器を報告する。今回報告する資料は、2021年秋に横浜ユーラシア文化館で開催した特別展「オホーツク文化－あなたの知らない古代」（主催：横浜ユーラシア文化館、東京大学人文社会系研究科、同附属北海文化研究常呂実習施設）の関連展示において借用・展示したものである。関東地方の博物館に所蔵されていることもあって公開される機会が少なく、オホーツク文化の研究者にはこれまであまり知られていなかった資料である。南千島出土の考古資料として重要であることから、本紀要において資料報告を行うことにした。

資料の来歴

資料の寄贈者である井上郷太郎氏（1918～2003）は八王子市出身の陶芸家であり、原始・古代資料のコレクターであった。そのコレクションは旧石器時代の石器から奈良平安時代の瓦まで幅広く、八王子市に寄贈された数は1700点余りに及んでいる。1962年にはこのうち約800点を掲載した『考古学資料図録 井上コレクション』が刊行された（井

上1962）。また、2005年に八王子市郷土資料館で開催された特別展に合わせて、縄文時代資料を対象を絞ったカラーの図録も刊行されている（八王子市郷土資料館2005）。

収集者の関心を反映してコレクションは古瓦・土器、さらに土偶や埴輪といった焼き物を中心としているが、石器や骨角器も含まれている。『考古学資料図録』に掲載された骨角器の出土遺跡をみると、東北では亀ヶ岡遺跡や宮戸島貝塚、関東では余山貝塚や椎塚貝塚といった著名な縄文遺跡からの出土品が中心である。この中に千島出土の骨角器5点が含まれている。『考古学資料図録』における記載内容は下記の通りである。

179 骨角銅器（銚・鏃） 右長10.0 骨・角・銅
オホーツク文化 千島択捉島留別村
（右2点骨製 中2点角製 次1点銅製鏃 左角製鏃）

銅鏃を含めて6点の掲載資料のうち、今回は骨角器5点を報告する（表1・図1・図4）。

表1 井上コレクションの骨角器

資料名	図	器種	分類	素材	重(g)	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)
資料1	図1-1	銚頭	A群	海獣四肢骨	7.9	110	11	8
資料2	図1-2	銚頭	B群	海獣骨	5.3	76	12	8
資料3	図1-3	銚頭	雄形	鹿角	0.9	31	13	4
資料4	図1-4	掘り具		鯨骨	12.0	99	17	13
資料5	図1-5	掘り具		鯨骨	25.6	149	19	14

*TAKAHASHI Ken 横浜ユーラシア文化館主任学芸員

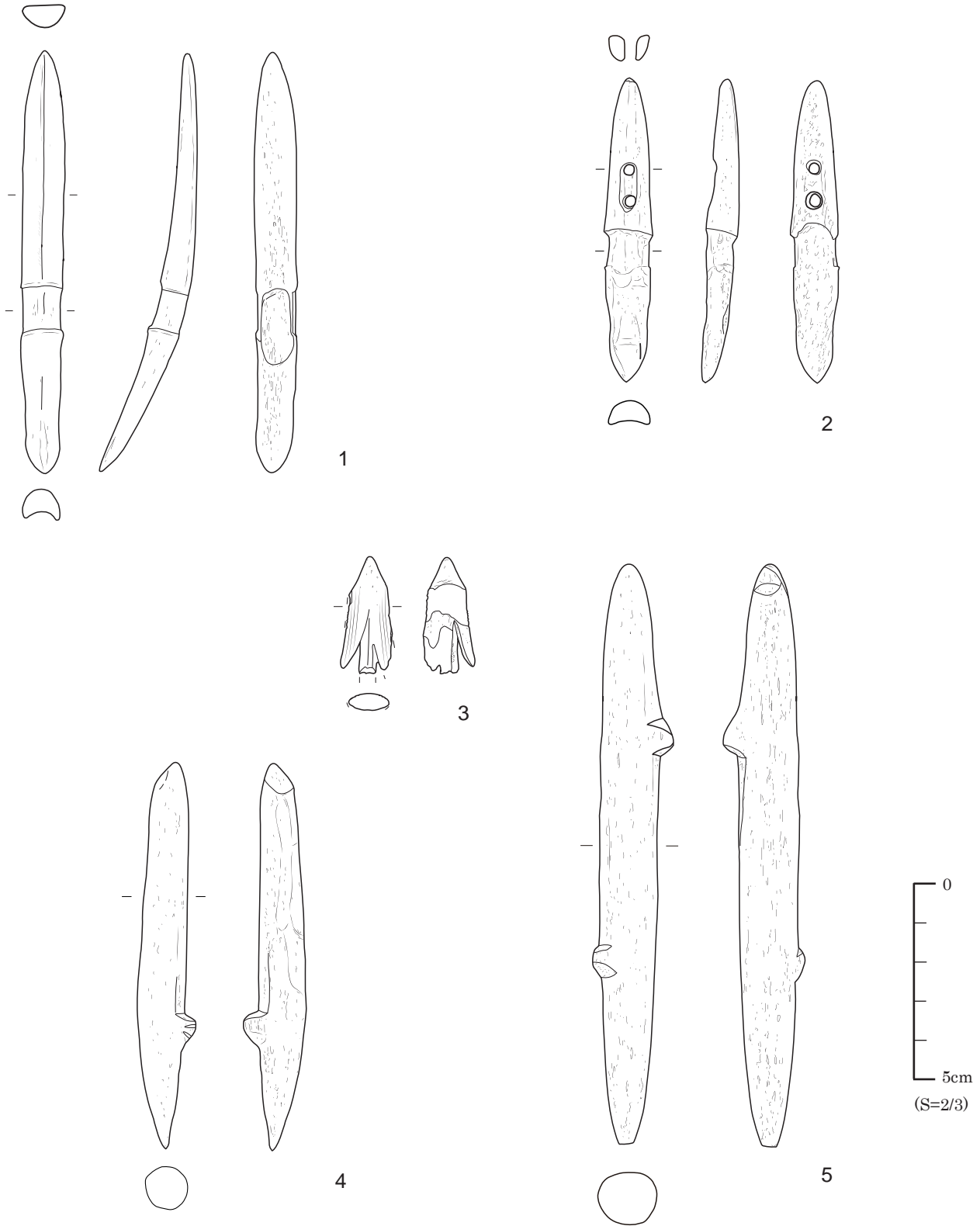


図1 井上コレクションの骨角器

出土地について

1933年に日本考古図録大成第15巻として刊行された八幡一郎『石器骨角器』に、今回報告する資料の一部が掲載されている(図2)。図版41に「北海道発見」として有孔円盤や垂飾、骨鏃、銚頭など骨角器17点の写真が掲載されたが、この中の11の銚頭が資料2にあたる。平面形だけの比較となるが、縦に並んだ2索孔と全体のプロポーション、ややくびれた尾部の形状などが一致する。なお佐藤達夫はこの図版から起こしたスケッチを示している(佐藤1953:図版10-5)。これに比べると決め手となる特徴が少ないが、八幡図版の8についても長さや突起の位置が一致することから資料4と同一だと考えていいだろう。

この図版41には「北海道発見」とのキャプションが付されている。解説では2点とも「骨銚」とされており、「礼文島発見のものに似る」とあるだけで、他の資料にみられるような出土地や所蔵者についての言及がない。択捉島も行政区画では北海道に含まれるため、このキャプションは必ずしも択捉島出土であることと矛盾するものではない。本稿では『考古学資料図録』にもとづいて、「択捉島留別村」出土だと考えておきたい。

択捉島の北岸中央部に位置する留別は、同じ北岸で20km北東にある紗那に次いで人口の多い中心的な集落の一つだった。ただし『考古学資料図録』には「留別村」とあり、必ずしも「留別」の集落に限定してはいない点に注意が必要である。留別村は択捉



(縮尺不同)

図2 八幡一郎1933『石器骨角器』掲載図版

島の南西側のほぼ半分を占めている。留別及び留別村における1930年代とそれ以前の考古学的調査について概観してみたい。

古くは1878年に千島を訪れたJ.ミルンによって、ルベツに堅穴のくぼみが残っていることが記録されている(Milne 1879)。1890年に択捉島の遺跡踏査を行った石川貞治は島内14カ所の地名を挙げたが、そのうちルベツ、トシモイ、タンネモイの3カ所が留別村の範囲であった(石川1891)。いずれも堅穴があり、トシモイでは土器片も採集されている。鳥居龍蔵は1899年の千島調査で留別に寄港し、東南岸の単冠湾に面したトシモイ(年萌)で調査を行っている。鳥居による択捉島採集資料は地点が明らかでないものが多いが、オホーツク刻文系土器とトビニタイ土器を含む(熊木・高橋編2010)。陸地測量部の稲田巳喜蔵は1909年に千島列島で遺物を採集し、後に東京帝国大学理学部人類学教室に寄贈した。この中に択捉島留別、羅臼、単冠湾の注記をもつオホーツク土器とトビニタイ土器が含まれている(同前)。いずれも留別村の範囲にある。

昭和に入って1930年に南千島択捉島・色丹島の調査を行った馬場脩は、「エトロフ島シャナ及びルベツ附近出土の石鏃」の写真を示した(馬場1937)。馬場は骨角器に造詣が深かったが、留別からは特筆すべき骨角器は見つからなかったようである。同じ頃、谷敬一によって留別村の南東岸にある恩根別貝塚、植別貝塚、カンケカラウス貝塚などが調査された(谷1931)。これらの貝塚では骨角器が多く出土しており、その内容も今回報告する資料と近いものがある。1932年には田中阿歌磨らの地理学者のチームによる南千島の調査が行われ、この時に採集された択捉島出土の遺物を斎藤忠が報告している(斎藤1933)。留別出土遺物は土器のみであり、続縄文が多くオホーツクも含まれている。年萌出土遺物は石鏃3点だが、この他に採集品の大型有孔石錘が報告されており、貝塚があったという。1933年には犀川会による「北海道原始文化展覧会」

が道内各地で開催された。根室在住の佐竹溪谷と長尾又六が所蔵する択捉島留別の資料も出品されていたが、全て土器と石器であり、骨角器はみられない(犀川会1933)。名取武光はこの展覧会の直後に南千島の発掘調査旅行に出かけ、留別の郵便局付近で続縄文の堅穴を発掘した(名取1945)。

以上から留別の集落付近にもオホーツク文化の遺跡があったことは確かであるが骨角器は報告されておらず、少なくとも貝塚が地表から確認できるといった状況ではなかったらしい。1930年頃に知られていた遺跡の中から考えると、本資料は島の南東岸中央部の貝塚のいずれかから出土した可能性が高いといえる。

事実記載

資料1は前田分類のA群銚頭である(前田1974)。構造は開窩兼用式、尖頭で尾部も分岐しないシンプルな形状である。尾部は将棋の駒状に鈍く尖っている。背面側の中央には明瞭な索溝が設けられる。腹面側の柄溝の先端はコの字状になっている。

資料2は前田分類のB群銚頭である。開窩分離式で索孔2つが縦位に並んでおり、背面側では導索溝でつながれている。背面側の中央に設けられた溝は、柄結縛溝(締着溝)の機能をもつ。柄結縛溝の上縁は浅いが明瞭な段をなすのに対して、下縁は不明瞭である。この部分に幅3mm程度のごく浅い削りの痕跡がみられることから、この部分を再加工した可能性も考えられるが、その意図は不明である。尾部にかけて一旦くびれた後にやや太くなり、端部は鈍く尖る。腹面側の柄溝の先端は丸みを帯びてアーチ状である。また、頭部の索孔より下の部分は腹面側が凹んでいるので、柄溝先端の段はごく浅い。

資料3は刃溝をもつ雄形銚頭の頭部破片である。薄手で先端は山形に尖る。片側は欠損しているが、幅の狭い刃溝を設けていたものである。逆鉤は左右互い違いだが、先端の1段だけが残っている。表面側の側縁と平行に3本の細沈線が施されている。

資料4・5は掘り具である。棒状で端部が尖るタイプである。資料4は左右互い違いに着柄のための突起を持つ。両端ともに鈍頭でやや光沢を帯びる。断面形は、一部に平面をもつ略円形である。資料5は突起が一つだけで、一端が尖るのに対してもう一端は斜めの面になる。尖頭の端部はよく磨かれており、断面は扁平な形状である。もう一端は斜めの面以外は円形に近い断面形を持つ。ただし、中央部での断面形は不整であり、面取りされているようである。おそらく再加工の結果こうした形状になったものだろう。

考察

銚頭3点はいずれも異なるタイプである。資料1はA群銚頭として一般的な形態であるが、保存状態のよい完形品である。資料2はB群銚頭であるが、索孔が縦位に並んでいる点が特徴的である。資料3のように華奢で先端に刃溝をもつ雄形鉤引式は、道東部オホーツク文化のものと同通する。道東部のオホーツク文化後期の遺跡から出土する銚頭のセットは、A群が主でB群と雄形鉤引式が少数件う構成が一般的である。この3点の資料から組成について論じることができないが、貼付文期の道東部の銚頭の組み合わせと比較して違和感はない。

開窩分離式のB群銚頭は道東部のオホーツク文化貼付文期前半に出現するが、索孔は横位に並ぶの

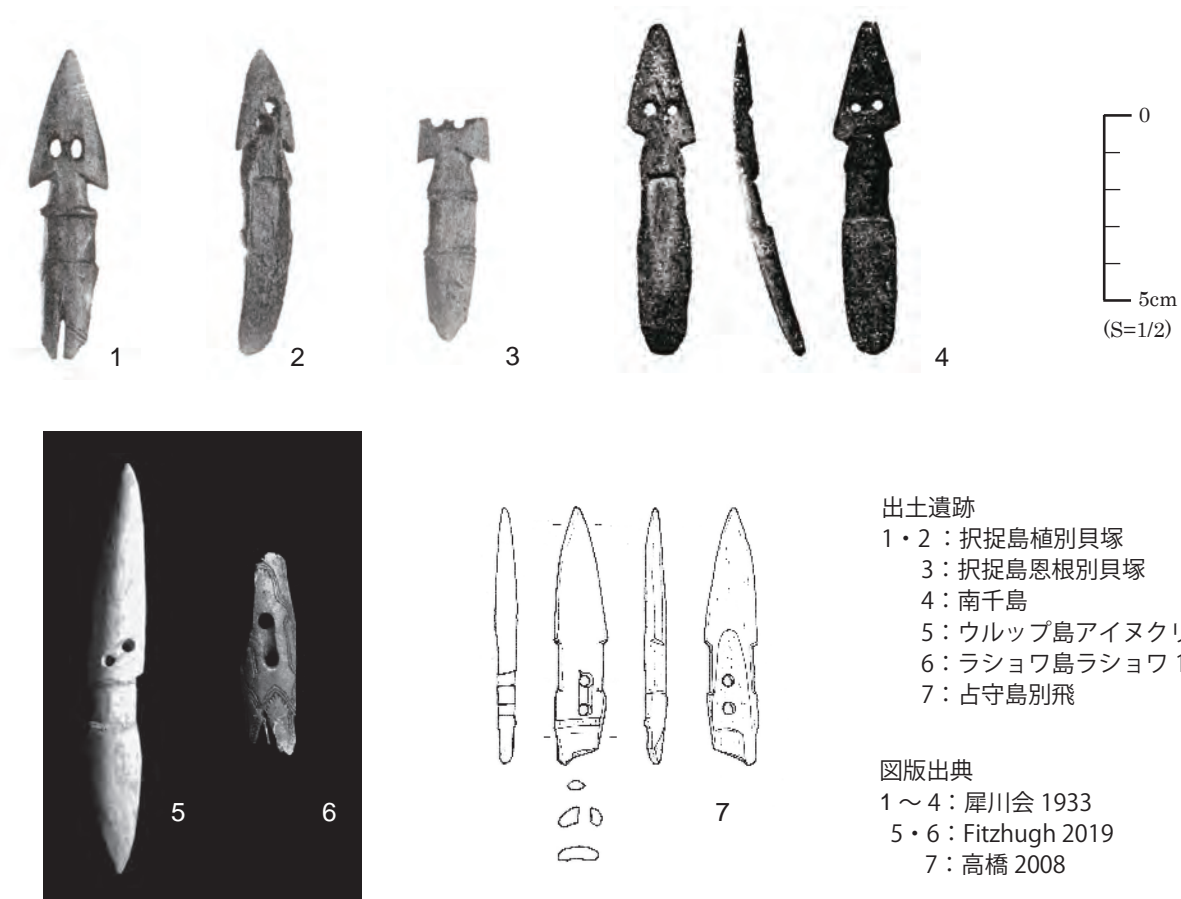


図3 関連資料：千島列島出土の開窩分離式銚頭

が通常である。器体の幅が比較的狭いB群銚頭では、横位に索孔を配置すると折れやすくなったと考えられ、索孔の部分で折損している例が非常に多い。しかし、それにも関わらず、北海道におけるB群銚頭は基本的に横索孔である点が特徴である。

一方、擦文文化の銚頭は銚縄を結び付ける索溝が柄の固定用の結縛溝を兼ねる開窩兼用式であった。擦文晩期になると、知床半島の羅臼町オタフク岩洞穴遺跡で、タイプⅢとされた縦位2索孔をもつ開窩分離式銚頭が出現する。このオタフク岩タイプⅢ銚頭は、開窩分離式という構造ではオホーツク文化のB群銚頭と共通するが、索孔の配置に加えソケットの幅が狭く断面がフラスコ状になる点が異なっている。その系譜は本州、北千島、サハリンの資料やオホーツク文化のB群銚頭などに求められてきた。筆者はオホーツク文化B群を有力な候補だとした上で、南千島との関連も視野に入れる必要があると指摘した(高橋2008)。今回報告した資料2はまさに南千島出土のB群銚頭であり、北海道の銚頭の変遷を考える上でも興味深い資料である。

ここで千島列島出土のB群(開窩分離式)銚頭を概観してみたい。谷によって択捉島東岸出土資料3点が報告されている(谷同前)。図3-1・2は植別貝塚出土である。1は頭部に横位2索孔をもつ資料である。2は索孔の配置が斜位になっている。3は恩根別貝塚出土の例で、1とよく似た構造だが、索孔の部分で折れている。4は馬場によって示された資料である(馬場1937)。出土地点は明記されていないが、南千島である。馬場は南千島ではエトロフ島と色丹島で調査したが、図示された骨角器の多くはエトロフ島シャナで採集されたものであるから、この資料もその可能性が高い。以上の南千島出土の4点は、いずれも頭部両側に逆鉤(カエシ)をもち、索孔の位置が頭部にある点が共通する。1は尾部中央に深い切り込みを入れて二又にしているが、他の3点は分岐しない。前述した八幡『石器骨角器』図版41には、縦位2索孔をもつB群銚頭が

もう1点写っている(図2-15)。先端から尾部の上半まで縦に真ん中から割れ、左側を欠損している。頭部には深い逆鉤をもち、尾部は両側に小さな距を設けている。この資料も出土地不明だが、やはり南千島出土の可能性はある。

近年のフィッツヒューらによる千島列島調査によっても、いくつかの銚頭が出土している(Fitzhugh 2019)。開窩分離式に絞ると、中部千島ウルップ島のアイヌ・クリーク1遺跡(Ainu Creek 1)から逆鉤をもたない斜位索孔の例が出土している(図3-5)。やはり中部千島ラショワ島のラショワ1遺跡(Rasshua 1)からは、縦位2索孔をもち尾部が三又に分岐する銚頭が出土している(同6)。背面に線刻による装飾を施しており、尾部の形状や背面の導索溝など、オタフク岩洞穴のタイプⅢと極めて類似性が強い。ただし、オタフク岩タイプⅢはソケットの側壁が内傾して断面がフラスコ状となり、ソケットの先端部に索孔を設ける点に特徴があるが、こうした点については写真からだけでは確認できない。7は北千島占守島別飛から出土した資料である。本来は縦位2索孔の開窩分離式銚頭だったが、折損して開窩兼用式(前田A群)に再加工されたとみられる資料である。

このように、千島列島では、B群銚頭の索孔の配置が斜位や縦位のもののみならず、さらにオタフク岩タイプⅢそのものも存在した可能性がある。オタフク岩タイプⅢは、千島列島における縦位2索孔のB群銚頭をベースに生み出されたのではないだろうか。今回報告する井上コレクションの銚頭は、南千島における縦位2索孔のB群(開窩分離式)銚頭の実例として、重要な資料だといえる。

資料4・5は掘り具であるが、板状ではなく棒状の器体をもつ。大場によるモヨロ貝塚出土資料の分類では、「骨製打突器」とされたものである(大場1955)。こうした先端部の断面が円形になる棒状のタイプは道北部にはみられず、道東部、特に根室方面に多い。トーサムポロ遺跡ではアイスピックとし

て報告された（北構他 1953）。谷による択捉島東海岸の発掘でも多数出土している（谷同前）。

結論

わずか5点の資料ではあるが、今回報告した択捉島出土の骨角器は道東部、特に根室半島のオホーツク文化の遺跡から出土するものと基本的によく類似している。これは南千島のオホーツク文化が道東部と密接に関係していたことを示している。ただし、資料2にみられる縦位2索孔の開窩分離式銚頭の類例は北海道本島では知られておらず、千島列島独特のものである。オホーツク文化からトビニタイ文化にかけての銚頭の変化にはまだ不明確な部分があるが、その空隙を埋める可能性のある資料として注目したい。

謝辞

資料調査にあたっては、八王子市教育委員会の阿部香子氏、河津美穂子氏にお世話になった。末筆であるが記して感謝したい。

文献

- 石川貞治 1891「千島エトロフ島堅穴、古器物発見地」『東京人類学会雑誌』6(59):173-175
 井上郷太郎 1962『考古学資料図録』、多摩考古学研究会
 大場利夫 1955「モヨロ貝塚出土の骨角器」『北方文化研究報告』10：173-249
 北構保男・須貝洋 1953「北海道根室半島トーサムボロ・オホーツク式遺跡調査報告」『上代文化』24:31-48

- 熊木俊朗・高橋健 2010『千島列島先史文化の考古学的研究』、東京大学常呂実習施設研究報告7
 犀川会編 1977（1933）『北海道原始文化要覧』、北海道出版企画センター
 斎藤 忠 1933「千島択捉島出土の土器及び石器」『考古学雑誌』23(6):333-344
 佐藤達夫 1983（1953）「我が国に於ける回転式銚頭について」『東アジアの先史古代文化と日本』、六興出版、pp.349-414
 高橋 健 2008『日本列島における銚頭の考古学的研究』、北海道出版企画センター
 谷 敬一 1931「択捉島東海岸発見の骨牙器」『史前学雑誌』3(4):15-25
 名取武光 1945「南千島の発掘旅行記」『噴火湾アイヌの捕鯨』、北方文化出版社、pp.237-277
 八王子市郷土資料館 2005『井上コレクション よみがえる縄文の美と技』
 馬場 脩 1937「千島群島出土の狩猟具及び漁具」『民族学雑誌』3(2):295-337
 前田 潮 1974「オホーツク文化とそれ以降の回転式銚頭の型式とその変遷」『東京教育大学文学部史学研究』96:1-35（再録：1987『北方狩猟民の考古学』同成社、65-114）
 八幡一郎 1933『石器骨角器』日本考古図録大成 15、日東書院
 Fitzhugh, B. 2019 Settlement History and Archaeology of the Kuril Islands in Regional Context. 第33回北方民族文化シンポジウム網走報告書『環北太平洋地域の伝統と文化 3カムチャツカ半島・千島列島』pp.15-24
 Milne, J. 1879. Notes on the Koro-pok-guru or pit-dwellers of Yezo and the Kuril Islands. *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 10: 187-198.



図4 井上コレクションの骨角器 (写真)

横浜ユーラシア文化館紀要 第11号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 11

2023年3月31日発行

編集 横浜ユーラシア文化館
〒231-0021 横浜市中区日本大通12
Tel.045-663-2424 Fax.045-663-2453
www.eurasia.city.yokohama.jp/

発行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団
制作 アンクベル・ジャパン株式会社

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures
12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan

Published by the Yokohama Historical Foundation
Printed in Japan by ANQBELL JAPAN CO., LTD.

©Yokohama Museum of EurAsian Cultures 2023

ISSN 2758-6332